

ウェールズのジェラルドの『ウェールズ紀行』を読む 吉賀 憲夫
Reading *The Journey through Wales* by Gerald of Wales Norio Yoshiga

要旨 Abstract

Giraldus Cambrensis or Gerald of Wales, one of the most gifted and entertaining of medieval writers, was born in Pembrokeshire in 1147 into a Norman-Welsh family. His *Itinerarium Cambriae* or *The Journey through Wales*, described in almost diary form, remains an incredibly valuable historical document of 12th-century Wales. He provides us with an accurate and quite comprehensive history of events, lively accounts of miracles, legends and folklore of all sorts from medieval Wales. The story about the River Neath's quicksands tells us about a dangerous Welsh journey. Gerald reported in detail about the habits of beavers in the River Teifi. Two strange lakes at the top of the mountains of Snowdonia stimulate our interest and he horrifies us with an account of a young man of Cemais who

was killed and eaten by toads. He is so busy narrating local happenings and miracles that he often forgets to tell about the details of his journey itself. However, these digressions are one of the attractions of his wonderful "travel book."

[keywords: Giraldus, journey, folklore]

ギラルドゥス・カンブレンシスことジェラルド・ドウ・バリ(Gerald de Barry, c.1146・1223)は、1146年頃ウェールズのペンブローク州で生まれた。ギラルドゥス・カンブレンシスとはウェールズのジェラルドを意味する彼のラテン語の筆名であり、事実、彼にはノルマン人の血と、南ウェールズの王家に繋がるウェールズ人の血が流れていた。したがって彼は当時のウェールズ人の支配者や権力者とは、ごく親しい関係ではなかったにせよ、親戚関係にあった。これはギラルドゥスの強みともなり、また弱みともなった。

才知に溢れ、野心家でもあった彼はパリ大学で学問を修め、ウェールズに戻り聖職者となる。ヘンリー2世の外交官となった彼は、1188年にカンタベリー大司教の供をして第3次十字軍兵士募集のためウェールズを巡った。それは早春の7週間あまりの旅であった。そのときの模様を記述したのが、第1巻と第2巻を合わせ27章からなる中世ラテン語で書かれた『ウェールズ紀行』(*Itinerarium Cambriae*)である。

この本は読み物として実に興味深い。地誌的情報もさることながら、危険な旅の様子、12世紀のウェールズで実際に起きた事件、土地にまつわる伝説、奇跡、不思議な出来事、聖人の崇りといったありとあらゆる話題に溢れ、それらが克明に、また興味深い筆致で書かれている。時として、彼はそれらの記述に熱中するあまり、話は次から次へととりとめもなく飛び、最後にはウェールズの旅とは無関係のものになってしまうのも一度や二度ではなかった。それが欠点か美点かは読者が判断すればよい。

まずニューラドノーにおける兵士募集(第1巻、第1章、以下I,1のように表記する)の様子から見てみよう。大司教直々の兵士募集の説教でもあり、熱狂に駆られた男たちは後先を考えず、十字軍に志願するため大司教の前に進み出ようとする。一方女性たちは、夫や恋人を戦争に行かせまいとして、身を挺してそれを食い止めようと修羅場が展開する。一方、ギラルドゥスといえ、大司教の説教が終わるか終わらないうちに、他の者をだし抜き、志願者第1号となる榮譽に浴した。このように、野心家たる彼は自分を売り込むことを決して忘れない。

土地に関する興味ある記述が多々ある。南ウェールズのニース川では、危険な流砂の中にギラルドゥスの大事な本や荷物を積んだ馬が飲み込まれそうにな

ったこと (I,8) が記されている。またテイヴィ川のサケ (II,3) やビーバー (II,3) の生態が詳細に、生き生きと叙述されている。また伝聞ながら、スノードニアの移動する浮島をもつ湖と、片目の魚の住む湖の話 (II,9) がおもしろい。少々気味が悪いが、ケマイスでのヒキガエルの大群に食われて骸骨になった男の話 (II,2) もある。

歴史上の人物や同時代の人々も興味深く描かれている。中でもペンブローク城をウェールズ軍から策略で守った狡猾な祖父ジェラルド・オブ・ウィンザーのエピソード (I,12) が目を引く。ロード・リースの三男でカノリッグ・アップ・リースというウェールズ人の若者の風貌と衣装 (II,4) が生き生きと描写されており、当時のウェールズ人の若者の姿を彷彿とさせる。

教会の墮落についての記述もある。(II,4) ギラルドゥスは聖職者の不正や、教会の墮落にたいして大鉈を振った改革者であったが、旅の途中のスランバダン・ヴァウルで地元の邪悪な俗人の権力者が聖職者として家族ぐるみで教会とその富を支配しているのを知った。しかしなんとギラルドゥスは結局この不正を見て見ぬふりをしたのであった。十字軍兵士募集という大事の前には、片田舎の教会の不正など小事であると思ったのかもしれない。

悪霊や妖精、奇跡や崇りといった超自然的な話はこの旅行記の中でも特に読者の興味をそそる。腹を立てるとその家の秘密を他人に喋ってしまう悪霊 (I,12) がペンブロークのステイーヴンの家にいたという。悪霊に取り憑かれた女の話 (I,12) もある。悪霊が体に入った部分は盛り上がりしており、そこに聖書や聖遺物を近づけると、悪霊はそれらから逃げようとして身体中を逃げまどったと書かれている。妖精の国に行った少年エリディルの話 (I,8) がある。この話は妖精の国に行った人物の名前が文献に現れる最古の例のひとつである。奇跡の話も多くある。天下の異変があると水の色が緑に変わる湖 (I,2) の話や、マーガム修道院の1ヶ月早い収穫 (I,7) の話、どこに捨てても次の日にはものと場所に戻ってくる石 (II,7) の話などがそれである。

大発見にまつわる話もある。それはギラルドゥスが幻の書であるマーリン・シルヴェスタの予言の書を北ウェールズの町ネヴィンで発見したという記述である。彼はこの予言の書を、大金をはたいて購入したのであった。ギラルドゥスはその本を翻訳し公表する予定だとも述べているが、その後その翻訳が世に出たという形跡はない。おそらく彼は手に入れたその書物が、実は偽物だと次第に思い始めたからなのであろう。

ウェールズの聖人はアイルランドの聖人と同じほど復讐心が強いとギラルドゥスは言うが、聖人の崇りに関する話も多い。その典型的な崇りのひとつが失明である。角を持った雌鹿を射殺した男 (I,1) は、狙いを付けた方の目の視力

を失ってしまった。聖遺物の首飾りの金の部分を盗もうとした男が失明した。聖なる教会を犬小屋として使ったヒュー伯爵(Ⅱ,7)は、目の部分を除いて全身鎧に覆われていたにもかかわらず、その無防備の目をバイキングの王に矢で射られ命を落としたという。

罰として身体の一部が物とくっつくという話も多い。聖デイヴィッドの教会で鳩を盗もうとした少年の手が教会の壁の石にくっつく話(Ⅰ,2)や、祭壇にキスをすると見せかけて祭壇に置かれてあった賽銭を口の中に入れて盗む常習犯の女の唇が祭壇にくっついてしまったという話(Ⅰ,2)などが語られる。また聖パトリックのラップを不謹慎にも吹いたバーナードという修道士の唇がラップにくっついてしまったという話(Ⅰ,2)が披露されるが、この話は彼の『アイルランド地誌』の第3巻、第34章に既に紹介されている。

『ウェールズ紀行』は、12世紀のウェールズおよびウェールズ人を知るための第1級の資料となっている。なぜならこの本はギラルドゥスという同時代の人間により書かれたものであり、特に彼はウェールズおよびウェールズ人というものを熟知していたからである。ただ彼は、ノルマン人やイングランド人の社会を、進歩した、活力に満ちた動的な社会と捉えているのに対し、ウェールズを野蛮で未開で静的な社会と捉えている感があることは否めない。したがってこの著書からは、活力に満ちた、変容しつつあるウェールズの姿は伝わってこないのも事実である。しかし、それを補って余りあるものがこの書物にはあり、読者を12世紀のウェールズに誘ってくれるのである。